

50 四号室の内部

昨夜の女とゴマ塩頭の年配の刑事が仲良くアイス・キャンディをなめている。

村上「失礼します」

と、村上が入ってくる。

村上「第一課の村上です」

女「……あたい、この人につかまったのよ」

と、馴れ馴れしく口を出す。

ゴマ塩頭の刑事、ジロツと村上を見上げて、

「淀橋よじほしの佐藤です」

村上「(びつくりして) 佐藤さん?！」

佐藤「どうかしたんですか?」

村上「いや、昨夜ゆうべの事件の担当を命ぜられて……それもあなた

と組むように今言われて来たばかりなんです!」

佐藤「ほう!」

佐藤は面白くなさそうに扇子を動かしている。

村上「どうぞ、よろしくお引き廻しを願います」

佐藤「どうぞよろしく」

佐藤、口の中で何かブツブツ言っちょつと頭を下げる。ひどくとつつきが悪い。

村上「あの……この女の貸したコルトの事で?」

佐藤「まあネ……阿部さんからちよつと聞いたもんだから……

それにコルトを持っている強盗たたくつてももの珍しいし……」

と、女を見て、

「……ところで、お前がコルト貸した奴、どんな男だい?」

女「どんなつて……そうね、この暑いのに冬の背広着てたわ」

佐藤「黒いやつだろ」

女「あら、よく知ってるわネ」

佐藤「フフフ……左ぎつちよだつてことも知ってるよ」

女「あら、そうだったかしら……」

佐藤「フム……ま、一服いっぷくやつてゆつくり思い出して貰うんだな」

と、自分の煙草を一本つけて、女にもやる。

佐藤、マッチをすって、女の煙草に火をつけてやる。

女、ガツガツと煙草をすうと、急に……、

「あ……そうだ、その男、左手でマッチつけてたよ……その手がブルブル震えてたのを思い出した。お前さん、まさかそのピストルで自分の頭射うつんじゃないだろうねって、そう言っっちゃったのさ」

佐藤「その男の名前、何ていうんだい？」

女「……そんなもの、知らないよ」

佐藤「嘘つけ……通帳見た筈だ」

女「見たよ……でも、変にむずかしい字で読めなかったよ……フフ、あたい学校大嫌いデネ」

佐藤「通帳持つてるのは誰だい？」

女「……」

佐藤「名前は？」

女「知らないわ」

佐藤「(なにげなく) 木村だろ？」

女「(思わず) 違う……!!」

女、見事にひっかかる。

佐藤「(ニヤニヤして) じゃ、誰だい？」

女「?……」

佐藤「かくすとこみると、お前のイロいろだな」

女「そんなんじゃないよ!」

佐藤「嘘つけ!」

女「嘘なもんか!」

佐藤、女を無視して、村上に話しかける。

佐藤「こんな具合に、男の名前をかくす奴はイロいろ女に決まってるんだよ」

女「(ムキになって) 本多ってんだよ」

佐藤「(すかさず) さ、ついでにみんな吐はいちまうんだな」

女、覚悟を決めると、佐藤の煙草に手を出して、

「もう一本貰もらうわネ」

佐藤「本多どの宿は？」

女「知らない……本当に知らないんだよ、あたいみたいなヒ

モにドヤなんか教えるもんか」

佐藤 「よく立ち廻る場所は？」

女 「知らないね……そうそう野球気狂<sup>きちが</sup>いだって噂だから、野球場にやよく行く筈だね」

佐藤 「前科者かい？」

女 「うん……女半殺しにして、二年程喰らい込んだことがあるって凄<sup>すご</sup>んでたよ」

佐藤 「いつ頃だ？」

女 「知らないね」

佐藤 「よし！」

と、立ち上がる。

女 「この煙草喫<sup>す</sup>い終わるまで待ってくれよ……」

佐藤、女を無視。

女 「チエツ……用が済んだからからって現金すぎるよ」

と、うらめしそうに佐藤を見上げる。

村上、佐藤のあざやかな訊問に茫然とする。

佐藤 「君、本多って奴のカード捜して貰えんかね……本多ってのは偽名かもしれないが、索引<sup>さくいん</sup>の材料には充分だろう」

村上 「ハア……で、あなたはどちらに？」

佐藤 「ええと……ここで一番涼しいのは、何処だっけ」